

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること

<p>(1) 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。</p>	<p>(2) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。</p>	<p>(3) 公徳心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。</p>	<p>(4) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。</p>	<p>(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。</p>
<p>人間は、一人では生きていけない。様々な集団や社会の一員として生活を営んでいる。それぞれの目標や立場を異にする集団に属しながら、共同で日々の生活を営んでいる。人が、集団の一員としてよりよく生きていくためには、自分の属する集団の意義を十分に理解することが大切である。各人がその成員としての役割と責任を自覚して、個々が責任を果たし集団の目標を達成する中で集団の向上が図られ、自己の実現もなされる。また、集団は成員相互の協力があって維持されるものであるから、互いに人間関係を大切にするとともに、励まし合うという協力関係をつくりあげていくことが大切である。</p>	<p>社会があれば何らかのきまりがあり、法とはこの社会におけるきまりの一つである。この社会生活に秩序を与え、摩擦を最小限にするために、人間の知恵が生み出したものが法やきまりであることや、社会の秩序と規律を守ることによって、個人の自由が保障されるということを理解することは大切である。また、社会生活の秩序と規律を維持するためには、一人一人が他人の権利を尊重し、自分の権利を正しく主張するとともに、自らに課せられた義務を確実に果たそうとする態度を育成することが重要である。権利ばかりを主張して、義務を遂行しなければ社会は維持できない。</p>	<p>公徳心は、社会生活の中で守るべき正しい道としての公徳を大切にすることである。社会生活においては、公徳を大切にすること、一人一人が共に手を携え協力しだれもが安心して生活できる社会をつくっていくとする社会連帯の自覚は欠かすことができない。この社会のすべての人々が、自分も他人もともどもによりよく生きようとしていることを自覚することから、互いに助け合い励まし合うという社会連帯の自覚も出てくる。社会全体に目を向けるとき、個人の向上と社会の発展とが矛盾しないような在り方が求められ、個々の努力が日々積み重ねられることが必要となる。</p>	<p>正義を重んじるということは、正しいと信ずることを自ら積極的に実践できるよう努めることであり、公正、公平にすることは、私心にとらわれて事実をゆがめたり、偏ったもの見方・考え方を避け、社会的な平等が図られるように振る舞うことである。しかも、人は、他の人とのかかわりにおいて生きるものであり、それゆえ、よりよく生きたいという願いは、差別や偏見のない社会にしたいという欲求につながる。したがって、よりよい社会を実現するためには正義を愛する心が不可欠であり、自他の不正や不公平を許さない、断固とした姿勢と力を合わせて積極的に差別や偏見をなくす努力が重要である。</p>	<p>勤労は、人間生活を成立させる基本的な要件であり、一人一人が勤労の尊さやその意義を理解し、勤労を通して社会生活の発展・向上に貢献することが求められている。もちろん、勤労には自らの目的を実現するために働くという面もあるが、職業のように、個人の生活を維持し、自分の幸福を追求するためと同時に、社会的分業によって社会を支えている面も見落とせない。勤労を通して社会に奉仕し、貢献するということを自覚し、充実した生き方を追究し実現していくことが、一人一人の真の幸福につながっていくことともなる。</p>
<p>中学生の時期は、学級、学校などの様々な集団の中で互いに深くかかわり合って相互理解を深め、それぞれの集団の中で人間的な成長を遂げるのによい時期である。集団生活の向上には、集団の規律を守ることが必要であり、そのためには生徒一人一人が自らの役割と責任を果たすという自覚が大切である。集団の中では、成員同士が互いに規律を守り、協力し合って、集団生活の向上に努めることが求められている。</p>	<p>中学生になると、社会の仕組みもある程度理解できるようになってくるし、社会の中で人間の生き方についての自覚も深まってくるので、法やきまりについてその意義を一層理解することができるようになる。確かな義務感と深い正義感を身に付け、日々力強く生活している生徒も少なくない。しかし、今の中学生には、きまりに従うことでよしとする傾向もあるが、反面、規律に反発する気持ちもある。</p>	<p>中学生になると、体の不自由な人へのいたわりのある行動や社会福祉施設などでのボランティア活動に共に取り組むなどよりよい社会の実現を求める気持ちが強くなっていく。その反面、公の場で、意識するしないにかかわらず自己中心的な言動をとってしまうことも少なくない。また、既成のものに対する反発が出てくる年代ではあるが、本来自己中心的で自分勝手な言動を良くないと思う心が内面には十分あり、だれもが望むよりよい社会の実現については大人より純粋に考えることができる。</p>	<p>中学生になると、社会の在り方についても目を向けはじめ、現実社会がもつ矛盾に気づき、理想を求める気持ちや正義感も強くなっていく。反面、周囲の目を意識し、多くの意見や考えに左右されたり、自己中心的な考え方や行動をとったりしがちとなる。そのため、不正な行動やいじめをはじめ差別的言動が目の前で起こった場合、内心ではだめだと思っけていてもそれを勇気を出して止めるなど正義の実現に努めることに消極的になってしまうことも多い。</p>	<p>中学生には、自分の目的を実現するためや、気の合った仲間と一緒にする仕事は意欲的に取り組むが、共同で行う仕事や集団での仕事などについては、これを厭う傾向も少なくない。自分の進路や職業について関心が高くなっていくこの時期に、勤労の尊さや意義について考えられるようにするとともに、働くことについての理解を通して職業についての正しい考え方を育てることや公共の福祉に努めようとする態度を育てることが大切である。</p>
<p>指導に当たっては、自分が所属する集団にのみ目が向き過ぎると、自分たちの利益のみを追求し、自分とのかかわりが薄いとと思われる集団や成員に無関心であるばかりか、排他的になりかねない。このような利己心や狭い仲間意識を克服し、協力し合って集団生活の向上に努める態度を育てることに留意する必要がある。さらに、生徒一人一人が集団の中で個性を失うことがないように留意して、それぞれの個性のびと自らのよさを発揮できるような集団の在り方を考えられるようにする必要がある。</p>	<p>指導に当たっては、法やきまりは自分達の生活や権利を守るためにあり、それを遵守することの大切さについての自覚を促すことが求められる。法やきまりについての意義を十分わきまえた上で、社会の秩序と規律を自ら高めていくとする意欲を育てる指導が重要である。また、権利と義務との関係を、「私」と「公」とのかかわりや、社会における自分の立場、自分の利害得失に固執せずに社会をよりよくしようとする気持ちなどから考えるように指導することが求められる。つまり、社会生活の中で守るべき正義として法やきまりを大事にする心が、日々の実践に結びついたとき、秩序と規律のある社会が実現されるということを生徒に理解させる指導の工夫が必要である。</p>	<p>指導に当たっては、生徒一人一人に自分も社会の一員であるという自覚を深めるようにして、互いに積極的に協力し合おうという意欲を育てるように工夫することが大切である。また、よりよい社会を実現するために、社会生活を営む上で必要とされる約束やきまりを重んじ、自他への配慮と深い思いやりを大切に、また、社会生活において互いに迷惑をかけることのないような行動の仕方を身に付けるよう指導する必要がある。</p>	<p>指導に当たっては、自己中心的な考えから脱却して、公のことで自分とのかかわりや社会の中における自分の立場に目を向け、社会をよりよくしていくとする気持ちを大切にすること。「見て見ぬふりをする」とか、「避けて通る」という消極的な立場ではなく、不正を憎み、不正な言動を断固として否定するほどの、たくましい人間が育ってくるように指導することが大切である。この世の中から、あらゆる差別や偏見をなくすように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会の実現に積極的に努めるよう指導する必要がある。</p>	<p>指導に当たっては、勤労の尊さを重んじる生き方を基に、奉仕の精神をもって自ら進んで、それを実践しようとする態度を培うことが大切である。その際、社会への奉仕に伴う喜びが自らの充実感として生徒一人一人に体得され、心から満足でき、生きがいのある人生を実現しようとする意欲にまで高めることを忘れてはならない。このような指導を通して、個人の立場を超えた社会全体の利益を大切にすること、公私の別を明らかにして、公共の福祉のために尽くそうとする態度の育成が望まれる。なおボランティア活動などの体験活動を生かすなど指導の工夫が求められる。</p>

4 主として集団や社会とのかかわりに関すること

<p>(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。</p>	<p>(7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。</p>	<p>(8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。</p>	<p>(9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。</p>	<p>(10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。</p>
<p>人間は、過去から受け継がれてきた生命の流れの中で生きている。そこで、まず、自分が在るのは、祖父母や父母が在り、そのかけがえのない子どもとして深い愛情をもって育てられたからであることに気付かせることが大切である。そのことを通して、自分の成長を願い無私の愛情で育ててくれた父母や祖父母に対して敬愛の念を深めることができる。今日家庭の状況も様々であり、その姿も様々でないが、大切なことはその家庭を構成する成員相互の温かい信頼関係であり、愛情によって互いが深い絆で結ばれていることの自覚をもつことが、より充実した家庭生活を築くことにもつながる。</p>	<p>学級や学校にあっては、生徒一人一人がその役割と責任を果たすことや、教師や学校の人々によって、学級や学校で様々な指導を受けたり支えられたりしながら、人間関係を深め、協力して生活することを通して尊敬や感謝の気持ちがはぐくまれる。また、学校には、それぞれ独自の校風があるが、それは先輩たちの長年にわたる努力によって培われたものであり、後輩たちが、それを継承し、さらに協力しあって、よりよい校風へと発展させてきたのである。</p>	<p>今日都市化あるいは過疎化が進んでおり、そのために郷土に対する愛着や郷土意識が希薄になっている傾向がみられる。しかし、生徒にとって、地域社会は家庭や学校とともに大切な生活の場である。郷土によってはぐくまれてきた文化や伝統に触れ、体験することを通して、そこに住むことの喜びが生まれ、地域社会の一員としての自覚がもてるようになり、郷土をつくりあげてきた人々への尊敬の念や感謝の気持ちも生まれてくる。郷土を愛し大切にすることとは、長い間にわたって、今、自分たちが生活している郷土をつくりあげてきた伝統や文化、先人や高齢者たちの努力に思いを寄せ、そのことに対する感謝の心をもち、これを今後の人々のためにより発展させて引き継いでいくことである。</p>	<p>内容項目(8)の「地域社会」「郷土」をまわり広げたとき、この項目の「国家」や「国」になる。そして前項の「地域社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め」る心を、国家という広がりで見れば、「国を愛し」「国家の発展に努め」「優れた伝統の継承」に努める心につながっていく。我が国について客観的に広い視野から認識を深めるとともに、我が国固有の優れた伝統や文化などそのよさについて理解を深め、その価値を継承し新たな文化を創造していこうとする態度の育成を図ることが大切である。この項目は、道徳教育の目標に示された「個性豊かな文化の創造」や「主体性のある日本人」の育成とも密接な関係にあり、国際社会の中で独自性をもちながら世界に貢献できる国家の発展に努める日本人として、主体的に生きることの自覚が求められている。</p>	<p>今日、国際化の進展には目を見張るものがある。私たちは、国際的規模の相互依存関係の中で生きており、我が国が、国際的なかかわりをもつことなく孤立して存在することはできない。すでに、日本人が、自分たちの幸せだけを追い求めることは不可能になってきているのである。したがって、将来の我が国を担う中学生には、日本のことだけでなく、国際的視野に立ち、世界の中の日本人としての自覚をしっかりともちつことが必要になってくる。</p>
<p>中学生の時期は、自我意識が強くなり、自分の判断や意志で生きていこうとする自律への意欲が高まっていく。そのため父母や祖父母の言動やしつけに反抗的になりがちである。ちょっとした忠告や叱責が、あたかも自分のすべてを否定するかのよう思えて、反抗したい気持ちになる。しかも、かつてのような大家族の人間関係の中でしつけられ、喜怒哀楽を共にし、生活の苦勞を分かち合いながら、人間関係の機微を学んだり、家族の連帯を自覚したりする機会も少なくなってきた。</p>	<p>中学生にとって、生活の大半を過ごす学級や学校が、重要な生活の場となっている。したがって、自分の学級、自分たちの学校という愛着や誇りをもつことは大切なことである。しかし、自分の学級や学校への関心やよりよい学級や学校づくりへの意欲は、必ずしも十分とはいえない。さらに、昨今の学級や学校における状況を見ると、教師や学校の人々への敬愛の情が厚いとは言いがたい。そこで、学級や学校における教師や学校の人々に目を向け、感謝や尊敬の気持ちをもてるようになることは、人間としての成長を促すこととなる。</p>	<p>中学生の時期は、自我の確立を強く意識するあまり、とすれば、自分が自分だけで存在していると考えがちである。このような傾向を考えると、自分だけで存在しているのではなく、「家族」や「社会に尽くした先人や高齢者」によって自分が支えられて生きていることを自覚し、それらの人々への尊敬と感謝の気持ちを深めることは極めて大切なことである。</p>	<p>中学生の時期になると、日本の国土や歴史に対する理解が深まり、文化や伝統などに対しても一層関心をもつようになる。そこで、この関心をさらに高め、国を愛する心と国家の発展に寄与しようとする態度を育成することが大切となる。ここで、国家の発展に努めることは、国民全体の幸福と国としてのよりよい在り方を願ってその増進に向けて努力することに他ならない。</p>	<p>中学生になると教科等の学習とも相まって、これまで以上に世界の様々な国々に対する興味・関心が高まっていく時期でもある。また、情報化社会の中で諸外国のできごとや情報についても多くの知識を得ている。さらに、世界の国々との様々な形でかかわりを体験する機会も増えている。このような時期に、世界の人々とかかわり、異文化への理解を深める機会を得ることは大切なことである。今後ますます国際的な視野と国際社会で生きる能力を身に付けることはこれまで以上に必要となる。</p>
<p>指導に当たっては、まず、この時期に、自分と家族とのかかわり、家庭生活の在り方が人間としての生き方の基礎であることを十分に理解できるようにすることが大切である。その際、自分が家族の中でどのような立場にあるのか、家庭生活を営む上で、自分はどうような役割を果たせばよいのかを考え、家族の一員としての自覚をもって積極的に協力していくことが、自分の課題であることに気付けるようにすることが大切である。</p>	<p>学級担任や各教科の教師の指導のもとに、授業やいろいろな活動に意欲的に取り組むには、生徒同士、教師や学校の人々とは、互いに信頼関係を持ち、敬愛の念を深める態度を育てることが大切である。そのことによる協力体制が整い、よりよい学級や学校生活への土台が築かれるであろう。学校の歴史や伝統に接する機会を増やしたり、生徒同士、教師や学校の人々との人間関係を深めたりする様々な体験を通して生徒に学校に対する愛着やよりよい校風の樹立と発展に努める態度を育てよう援助する必要がある。なお、こうした指導の根底には、教師自らが進んで生徒一人一人に向ける厚い信頼と深い愛情に裏打ちされた温かいまなざしと慈しみのある態度で接していくことが欠かせない。</p>	<p>指導に当たっては、多くの地域で、郷土意識や地域社会に対する連帯感が薄くなっており、こうした傾向が強まっている事実を考慮し、地域の人々との人間関係を問い直したり、地域社会の実態を把握させたりして、郷土に対する認識を深め、郷土を愛しその発展に努めるよう指導していく必要がある。また、地域社会に尽くし、自己の人生を大切に生きてきた先人や高齢者への尊敬と感謝の気持ちをはぐくむよう指導の工夫に努めることも大切である。</p>	<p>指導に当たっては、国を愛することは、偏狭で排他的な自国賛美ではなく、国際社会の一員としての自覚と責任をもって、国際社会に寄与しようとする点につながっている点に留意する必要がある。そのためにも、「国を愛」すること、次の項目の「国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する」とことは切り離せない関係にあることに配慮した指導が大切である。</p>	<p>指導に当たっては、他の国には日本と同じように、その国の伝統に裏打ちされたよさがあることやその国独自の文化と伝統に各国民が誇りをもっていることを理解させることが大切で、他の国の人々や異文化に対する理解と尊敬の念が重視されなければならない。さらに、「世界の平和と人類の幸福に貢献する」という理想を抱き、その理想の実現に努めることが、国際理解にとって極めて大切である。その理想の実現のための基本となることは、くによってももの感じ方や考え方、生活習慣などが違っても、どの国々の人々も同じ人間として尊重し合い、差別や偏見をもたずに公正、公平に接するということであり、それが真の国際人として求められている生き方でもある。</p>

